

九州大学図書館蔵細川文庫目録

<https://doi.org/10.15017/12402>

出版情報：語文研究. 8, pp. 40-58, 1959-02-01. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：



九州大学
図書館蔵
細川文庫目録

凡例

一、これは研究家有志の休日を利用して作成した実用的な目録である。全部を二部に分つ。

二、第一部は全書冊にわたる。更に二分して、その一を旧蔵者宇土細川家に直接関係あるもの、その二を以外の一般書にあてた。

記述は最も簡略を旨とする。書名は主に外題により、内題の異なるものは注記する。〔 〕印をほどこしたは図書館における仮題である。注記なきものは写本で、刊本は刊としす。書型は大きさのみにより装釘に及ばない。□冊とするは冊子本、□巻とあるは卷子本。冊数の下の（ ）中は一冊本の墨付丁数である。書名の最下にある番号は整理番号（請求番号）である。勅撰集の如き著者名ものは編著者を記さない。書写の時と人の記入は明記あるもののみ時に奥書を直接にかかげる。推量の事項はその他の注記と共に（ ）中に入れて最後に掲げる。

一、第二部は第一部の記載のみでは不充分と思はれるものを再出して、奥書その他書誌的な注記を加へる。第一部の書名の上の○印は、この再出を意味する。ただしこの種のものには、以上でつくされてゐない。機会と希望あれば、又本誌上に追加する。

一、配列は大體日本十進分類法によるが、厳守してない。

以上

第一部

その一、細川家關係書

細川之系図 大一冊（一五丁） 一七〇

〔清和天皇より室町期まで、貞享二年姑洗中八日跋の本の写〕

系図 大一冊（一四丁） 一七一

〔江戸中葉写、熊本細川宗家、藤孝より延宝頃まで、前同筆〕

〔細川系図〕 折大一帖 一六八

識語 右之通於日光山奉納之写也（寛永十九年細川光貞より太田備中守に出したものの、それに近き頃の写）

細川家覚書 大一冊（一八丁） 一七二

〔江戸中葉写、内題「被對御当家故越中守忠興法名三斎御忠功覚」〕

細川家伝 大八冊（三峽） 一五九・一六〇・一六一

一名系譜家伝録（江戸中葉写、共に藤孝より綱利までの分）

系譜家伝録 大一冊(五五丁) 一五八

(江戸中葉写、藤孝譜のみ)

藤孝事記 大一冊(七六丁) 一六七

(江戸初葉写、幽齋伝資料集)

有孝公興生公興里公記録 大一冊(六四丁) 一五六

安永四年 河島安志写(奥書)(宇土細川家三代の記)

立之公記録 大一冊(二九丁) 一六四

黒木順蔵改編 寛政元年写(奥書)

立政公記録 大一冊(二九丁) 一六三

黒木順蔵改編 天保三年写(奥書)

当家雜記 大一冊(一〇〇丁) 一六五

(江戸初葉写、志水雅楽の子孫の手になる、藤孝事記と同筆)

宇土細川家文書 一包 一七三

(系譜及びその資料、对幕府関係のもの、廢藩置縣前後のものなど)

百人一首抄 大一冊(八四丁) 一〇〇

細川幽齋著(江戸中葉写、慶長元年幽齋奥書あり)

伊勢物語關疑抄 大二冊 一一八

細川幽齋著(江戸中葉写、文禄五年幽齋奥書あり)

幽齋公路行記 大一冊函(二七丁) 一四〇

細川幽齋著(慶長前後写、慶長十五年九州道の記、箱書、幽齋自筆とあれどしからず)

衆妙集 雜部 大一冊(一五丁) 七三

(江戸中葉写、刊本より所収多し、梅屋旧蔵)

玄旨公御連哥 大一冊(一一六丁) 一四四

(江戸中葉写、発句、附句、連歌全巻、願詠和歌等を収める)

大原野千く連かのき 半一冊(三丁) 一四ノ四

策彦著(江戸初葉写、幽齋等の元龜辛末の大原野千句連歌記)

詠歌大概聞書 三光院内府 御講釈 大二冊函 一四ノ一、二、三

三条西実枝著 細川幽齋編 (上) 細川幽齋 (下) 中院通勝

写、(天正十四年 文禄四年幽齋奥書あり、この書鳥丸資慶から

細川行孝への遺品にて、その為、資慶とその子光雄の書簡各一通を附す)

詠歌大藏抄 大二冊 一七

三条西実枝著 細川幽齋編(寛永三年三月廿五日の奥あり、それ

よりやゝ前の写、詠歌大概聞書の転写)

御下知宛所等条々聞書 大一冊(一八丁) 一五七

細川幽齋編 延宝八年写(幽齋筆本による転)

書札調練 大一冊(五〇丁) 一三一

細川幽齋編 延宝八年写(自筆本による写)

年中次第 大一冊(二三丁) 一六六

細川幽齋編 延宝八年写(幽齋筆本による転)

閑琴葉 大一冊函(四二丁) 一八

細川三齋著 自筆(和歌の抄記)

細川行孝和歌 一卷函 五三

細川行孝著 自筆(「山浄法皇勅点」と函書にあり)

百首 一卷函 一〇三

百首 一卷函 一〇三

細川行孝著、延宝二年、裏松意光写

勅点和歌 一卷函

狩野素仙成信画

葵花集 中一冊(一一二丁)

細川行孝編(江戸中葉写、細川三斎・行孝・同母、同奥方の詠草の集、靈元法皇以下堂上の批点を書き加へあり)

〔細川行孝二十首〕 一卷函

細川行孝著 自筆 円浄法皇勅点

繞耳底記 横一冊函(一四二丁)

細川行孝編

関書 大一冊(一〇〇丁)

細川行孝編(江戸初葉写、和歌に關すること多し)

立允翁詠草 枳一冊

(鳥丸資慶奥書あり、転写本)

源立院和歌 一卷函

(靈元法皇評あり)

源立院和歌 一卷函

(円浄法皇勅点、鳥丸資慶奥書)

御詠草 一束

栄昌院福子(短冊四枚、和歌草稿四枚、和歌草稿綴五冊、細川立

之短冊一枚)

海辺秋色 横一冊(二〇丁)

清源院軌子(天明三年江戸から熊本までの記、転写か)

青葉山路 横一冊(三三丁)

清源院軌子(天明三年熊本江戸間紀行、転写か)

色紙集 一箱

(法苑院、清涼院、ゆふ姫等の手ありと見えるが、他をも混す、計三十一枚)

長命様御自筆短冊 一枚

包紙に「右浅利和兵衛持伝五枚之内一枚我等取申候故我等詠社頭祝書遣也宝曆十年十二月十九日」

その二、一般書

書籙目錄 中一冊(五丁)

(「梅之御寮主入日記」と内題あり、梅屋手許藏書の目錄)

三種神器関書 大一冊(二六丁)

附柿本大明神神階宣下次第并和歌(宣下は享保八年のこと、その頃の写、梅屋旧蔵)

日本記書 大一冊(三二丁)

奥書

慶長二年丁酉九月日書之序 五十九歳尊勝院(神道書)

いちしのひろめ 大一冊(一〇丁)

奥書

天正十二年甲申二月十三日重頼(神道書)

將軍円義

將軍広目 大一冊(六丁)

奥書

將軍円義

將軍広目 大一冊(六丁)

奥書

奥書

天正三年乙亥四月廿二日重正(花押) (神道の書)
廻行上人示翰之写 中一册(五丁) 七

(江戸中葉写)
源平系図 枅一帖(三六丁) 一五五—一

(江戸初葉写)
豊後国速見郡由布院御檢地帳 大二十册(中目錄四册) 一一
附 檢地村目錄

(慶長六年のもの写しと元和元年のものを混す)
石見園名所 大一册(七丁) 五五

(寛文八年七月写本の転写、石見園の名所和歌、内題「石見園名所少々」)
宮家不審問答 大一册(七〇丁) 一五五

中原職俊著(元禄十年職俊跋あり、江戸中葉写)
九条家草圖 一卷 二二〇—二

(江戸中葉写、至徳二年十一月三日の記あり)
西園寺家草圖 一卷 二二〇—一

(江戸中葉写)
伊勢物語三玉集花之部 大二册 一一二

(室町末葉写、武家口常心得の書)
〔法令集〕 大一册(二八丁) 一六九

延宝八年写(幽齋筆本による転)
条々問書の事 大一册(六五丁) 一三八

延宝八年写(幽齋筆本による転、武家故実に関する)
〔伊勢流故実之書〕 大一册(七〇丁) 一三七

延宝八年写(天正七年の奥ある本を幽齋写よりの転)
〔聞書条々〕 大一册(六八丁) 一三五

延宝八年写(天正二十年奥書本の幽齋転写より、伊勢流故実の書)
〔聞書条々〕 大一册(一三三丁) 一三九

(延宝八年写か、大館流故実の書にて、永禄九年幽齋筆本より転)
〔安東政藤旧記〕 大一册(一一一丁) 一六二

(武家故実の書)
聞書条々 大一册(八三丁) 一三六

延宝八年写(弓道に関するもの、幽齋自筆本よりの転)
三五要録 一卷函 一七四

藤原師長著 後小松院宸翰
〔弓道伝授書〕 大十四册 一九一—一九四

(一々書名あれど一括する。文政十三年六月吉日、上羽又兵衛一益の書して奉つたもの)
〔馬道之書〕 大一册(四一丁) 一九八

(天文十八年萩野康清の奥ある本、幽齋筆本の延宝八年写なるべし)
吹毛抄(外) 半一册(二四丁) 一八九

(天正十九年幽齋奥書本の江戸中葉写、刀剣の書)
鷹百首・鷹連歌 大(二二丁) 九〇

西園寺公経著(百) (百首には明応六年の奥あり、江戸中葉写)

大追物初心之者可心得裏 大一冊(四五丁)

(江戸初葉写) 一九〇

袖珍宝艸 大一冊(八丁) 二〇八

(江戸中葉写、梅屋旧蔵、薬法を集めたもの)

谷響集抜書 半一冊(四丁) 四

(寂照堂谷響集より大黒神像安食厨を抜出したもの、江戸中葉写)

玉錦集 中一冊(景付三丁) 一五四

(江戸中葉写、梅屋旧蔵、平安朝書、十二月別称など集めたもの)

世尊寺家十八体書 一卷 一八五

(奥書)

世尊寺行尹卿真跡十八体書為榮昌尼公謹摹写之 文政二年四月

六日 六十二歳源(皇代)弘賢 一八四

入木道相伝聞書 大一冊(三八丁)

(持明院基時より相伝、天明六年奥書ある書の転写)

入木道相伝之事 大一冊(三四丁) 一八三

(持明院基時よりの相伝にして、安永八年奥書あるものより転

写) 四〇

梅窓筆記 横大一(二九丁)

金森頼盛著(元文三年奥書ある本の写、書道の書) 一八八・

能書方 横大二冊 一八七

(男女詠艸、懐紙の部の二冊、江戸末葉写)

世尊寺家三十六人歌合散様 横大三冊 三三三

(天明五年源尹祥の奥あるものの転写)

〔和歌書様〕 一卷 五一

(江戸末葉写) 三二

〔色紙書様〕 横大一冊(三三丁) 一八一

(江戸末葉写) 四三枚

色紙集 四三枚 一八一

(皆江戸時代繪紳家の筆) 一七八

公家寄合書 十二月歌 一卷

近衛基熙、道晃法親王、覺恕法親王、尊證法親王、飛鳥井雅章、

日野弘資、柳原資行、菊亭公規、中院瀧茂、花山院定誠、千頼有

能、持明院基時筆

手本「古今集序」 一卷 二二

(江戸初葉写) 七七

〔古今集抜書〕 一卷 八四

(江戸初葉筆写) 八四

持明院基時筆十二月わか 大一冊(一三丁)

(奥書) 此一帖者故大納言基時卿之真蹟也仍加奥書 享和元年

季秋 羽林藤(花押) 一〇二

持明前権大納言基時卿筆 一卷函 八五

(奥書) 応木下肥後守所望梁禿毫字 元禄十三年三月日 前権大

納言基時(榮昌院様御讀物)

瀟湘八景 大一冊(九丁)

三國筆海堂筆 十二月歌の心 一卷函 一七六

四四

長谷川義辰画

四面手本 一一枚

一七五

(木下大和守の画と包紙にあり)

人物繪物 一卷

一七七

(江戸中葉写、列代武將等十三人、粗画)

志野流香道圖書 六冊函

一九七

(不滞圃正統の奥あるもの三、蜂谷家秘書と云ふもの一、皆江戸末葉の写)

家
依り流砲術秘録 大五冊函

二〇九—三

(江戸末葉写)

考録 大二冊函(二〇丁)

二〇九—一

(江戸末葉写、花火の書)

〔花火の書〕 大二冊函(三八丁)

二〇九—二

(江戸末葉写)

悦目抄 大一冊(四八丁)

一六

(正安元年為世、文保三年宮内卿律師伊恵の奥あり、江戸中葉の写)

○甚設秘抄(悦目抄) 大一冊(五〇丁)

四六

藤原基俊著 江戸中葉写、嘉禄元年の奥書あり)

長歌短歌古今相違事 大一冊(五〇丁)

三八

(藤原定家)著

奥書

右折京極寛門定家以正筆文字仮名之処等無相違書写者也 寛文六

丙午年臘月下旬

○詠歌大概 大一冊函(九丁)

一五

藤原定家著 室町中葉写、札三条西室隆写(榮昌院讀物)

詠歌大概 大一冊函(二二丁)

一三

承応二年細川行孝写(函書に「行孝公御十八歳御筆」とあり)

○詠歌大概 大一冊函(一七丁)

一一—一

十市源忠写(榮昌院讀物、内容は大概の抄)

十妹和歌 折大一冊函

一八〇

(江戸中葉写)

三部抄 大一冊(四三丁)

二四

(表紙に「妙法院殿翫然法親王」とあるは筆者の意であらう、江戸初葉写)

三部抄 大三冊函

二一

中院道躬(詠)、飛鳥井雍章(首)、冷泉為綱(末)、日野輝光

(外題)筆

三部抄 枳三冊

二五

(附紙に百人一首は近衛基熙、未來記は中院通茂筆、詠歌大概未考とあり)

和歌六部抄 大一冊(九二丁)

四七

慶長六年阿野実頭写(屋代弘賢進上のつゝみ紙を附す)

○竹林抄 枳一冊函

一四六

藤原為顯著(内容は竹園抄、室町末葉写、近衛種家女慶福院殿玉榮筆の極札あり)

○よるのつる 大一冊(一五丁)

五〇—二

阿仏尼著 (奥書)

此夜鶴者安齋門院四条作也冷泉家秘本以為益卿真筆幼稚春之比令

書写散 寛永十八年初春日 源 (花押) (細川光利か)

○秘歌集 大一冊函 (二九丁)

(函書「甘露寺大納言伊長卿正筆」、新古今等の抄記)

○清案集 大二冊

(江戶中葉写、和歌作法書)

詞花懸露集 大一冊 (一七丁)

(附、庭のをしへ、江戶中葉写)

和歌詠方口決 大一冊 (三八丁)

中院通茂著 (安永六、文化五、文化十年の奥書あり、江戶末葉写)

和歌以登古草 大一冊 (二四丁)

(江戶中葉写、員数和歌や源氏引歌の如きの集、梅屋旧蔵)

和歌物語 大一冊 (四三丁)

桂秀樹 (多田南嶺) 著 (明和元、安永二、天明元の奥あり、江戶

末葉写)

當時詠歌打聞集 大一冊 (一一丁)

源義俊 (多田南嶺) 著 (江戶末葉写)

万葉集難事 大一冊

頭昭著 (内題 万時、宝徳二年菅原為賢等の記あり、江戶中葉写)

古今灌頂巻 大一冊 (四八丁)

(元亨三年藤原為兼の署名あり、附「日本紀秘歌」、江戶初葉

写)

廿一代集巻頭和歌 折一帖函

(江戶中葉写、堂上の人々の筆)

八代集 大八冊函欠

(江戶初葉写、千載、後拾遺、詞花、金葉、新古今のみ、金葉集

に頼阿の奥あり)

八代集秀逸

三代集之間事 大一冊 (一九丁)

藤原定家編 (「八」は長享三年奥、「三」は慶長三年幽齋與書本

よりの江戶初葉転写)

○勅撰名所和歌抄 大二冊

宗碩編 天文十一年写 (永正三年の奥書あり)

○代々勅撰部立 併一冊 (六三丁)

康応元年写 (三条西実隆書入あり)

正風舛抄 大一冊 (一三丁)

(江戶初葉写、千載等勅撰集の抜書)

三秘抄 大一冊 (八五丁)

藤原為家著 (佐方宗佐の奥書ある書の江戶初葉転写)

宗祇聞書写 中一冊 (五四丁)

(江戶末葉写、頭書に「宗祇一卷之間書 万葉集之内記伝也

道之最上歌秘事也 如何々々可秘之」)

宗祇聞書 半一冊 (三七丁)

(前書と同内容の写、欠)

新選帝説集 大一冊

(江戶初葉写、藤原俊成に托した偽書)

古今和歌集 半一冊 (三三丁)

(貞応二年定家奥あり、極札に「頓阿門人兼空法師」、室町中葉写)

古今和歌集 小一冊函(一四〇丁) 六三

文明十八年三条西実隆写(貞応二年七月定家元亨四年兼好等文明十九年実隆迄奥書多し)

古今和歌集 大一冊函(一四四丁) 六四

(室町末葉写)

古今和歌集 大一冊 六〇

(江戸初葉写、貞応二年定家奥あり)

古今和歌集 大二冊函 六五

(江戸中葉写)

古今和歌集 大二冊 七〇

(江戸刊)

古今集秘事聞書 半一冊(八丁) 二〇

(江戸中葉写、梅屋旧蔵)

後拾遺和歌集 大二冊函 六七

(室町中葉写、内題「後拾遺和歌抄」とあつて抄本、極札に飛鳥井雅綱御真跡)

後拾遺和歌抄 半一冊函(五三丁) 六八

(東常縁写、慶長十四年の、幽齋奥書あり)

〇金葉和歌集 大一冊函(一一五丁) 五九

(室町中期写、中御門宣秀筆と奥書あり、屋代弘賢函書)

金葉和歌集 大一冊函(一一一丁) 五八

(極札「飛鳥井殿雅春卿」室町中葉写)

〇詞花和歌集 大一冊函(七七丁) 七四

(室町中葉写、伝飛鳥井雅綱筆、榮昌院の讓物と云ふ)

千載集(釈教部) 小一冊函(二〇丁) 八八

(室町中期写、徹書記門弟正殿筆と極札あり)

千載和歌集 大二冊 八七

(江戸中葉写)

新古今集聞書 大一冊(七三丁) 八二

東常縁著(幽齋、慶長九年ト合セ二度、中院通勝 文禄五年慶長

二年再度奥書ある本の江戸中葉の転写)

新古今集聞書 大一冊(八〇丁) 八

東常縁著(慶長二年中院通勝の跋ある書の江戸中葉写)

風雅和歌集 大二冊函 一〇一

(室町中葉写、極札に「伏見宮邦高親王御筆」)

類葉抄 大十三冊 一〇九

中御門宣胤編(延徳三年宣胤奥あり、江戸初葉写)

題林愚抄 大七冊欠 一〇八

山科言緒(江戸中葉写、春二、冬一、恋二、雜二のみ)

摘題和歌集 大三冊 九二

(江戸中葉写)

種心秘要抄 大一〇冊 二六

(江戸中葉写)

百人一首 併一冊函(一九丁) 九九

(牛庵極札に八宮良純法親王筆)

百人一首 附古歌仙・女房歌仙 中一冊函(二八丁) 九八

(奥書) 天和二年暮春上旬書之終 右中将藤原(今城) 定経

百人一首 大一冊函(二五丁) 九七

堀河院百首和歌之内聞書 大一冊(二二三丁) 四三

(外題「堀川百首」、江戸中葉写)

○自讃歌 半一冊函(三三丁) 七六

後西院天皇宸翰(榮昌院讓物と添書二通)

○自讃歌抄 大一冊(六九丁) 八三

頼阿著(江戸中葉写、元徳二年頼阿奥書あり)

自讃歌 中一冊(二〇丁) 八〇

(江戸中葉写)

沙門咏篇 大三冊帙 一四八

梅屋主人編(享保中の写)

富山十詠 半一冊(一三丁) 一〇五

梅屋主人編 享保十四年序編者写

藤原義孝集 半一冊(一四丁) 一〇四

藤原義孝著(牛隠極に覺源法印筆と、南北朝頃写)

○土御門院御百首 大一冊函(二四丁) 一二二

土御門天皇著(連歌師宗義筆と極札あり、榮昌院讓物)

○山家集 横一冊(六八丁) 七一

西行著 慶長八年 烏丸光広写

御裳讀歌合 大一冊(二〇丁) 五七

西行詩、藤原俊成判(室町末葉写、異本の校合あり)

拾遺草抄出聞書 大一冊(一一三丁) 二九

東常縁著(文禄四年幽斎奥書よりの転)

○孝範集 枳一冊函(二七丁) 六九

源孝範(室町中葉写)

○春夢草 大一冊函(四〇丁) 七五

牡丹花肖柏著(室町中葉写、菅原長治筆と極めあり)

○群經聊百首 大一冊(一四丁) 四五

藤原経著(室町中葉写、極札に「兼載法師筆」とあり)

○美濃背山奉納歌 枳一冊(墨付九丁) 一〇六

藤原利綱著 永正八年自筆

三皇和歌集 大三冊帙 七二

後水尾・後西・靈元三天皇著(江戸中葉写)

老槐集 大一冊(七五丁) 一一〇

中院透茂著(江戸中葉写)

清容和歌 大一冊(墨付一七丁) 八九

戒光院著 梅屋主人編 享保十一年序

梅玉和歌集 大一冊(二丁) 四一

梅屋主人著 享保十四年自筆

腕山和歌集 大一冊(一五丁) 六一

菅原恒直著 梅屋主人編 享保十四年序編者

源氏狭衣歌合 半一冊函(四〇丁) 五六二

(江戸初葉写)

永祿歌合 大一冊函(二〇丁) 五六一

(江戸初葉写、永祿六年八月十五夜三首歌合)

若草記 大一冊 五〇一

兼載著（宗祇の老のすさひ外一を附す、江戸中葉写）

聖廟王吟 中一冊（九丁）

（明暦元年写本の転、連歌）

和漢朗詠集上 大一冊（二九丁）

（江戸初葉写）

謡本 大一冊函（六七丁）

天正三年幽斎写（千寿、昭君、葵上、野宮、誓願寺所収）

御調本 中三冊

天正四年三月七日観世宗節写（糸女、ととふ・やうきひの三部）

袷衣系図

伊勢物語系図

（江戸初葉写）

伊勢物語 大一冊（七七丁）

（流布本奥書、室町中葉写）

伊勢物語 大一冊（七一丁）

（天福本、武田本流布本の奥書あり、包紙に「四辻正三位公紹卿

正筆」と。室町中葉写）

伊勢物語 中一冊函（八九丁）

三条西夷隆写（天福二年正月廿日の奥書あり）

伊勢物語 大一冊函（九六丁）

（武田本の奥書、天正十七年十月下旬と今一つの幽斎奥書あり、

包紙に「外題中院也足、表紙、絵宮川筆者姉」などあり、幽斎に

近き頃、幽斎筆よりの転写か）

伊勢物語 大一冊（五〇丁）

（奥書）

右或依所望令書写早侍従源（重孝

伊勢物語 大一冊（七七丁）

（武田本の奥書あり。近世初葉写）

伊勢物語 半一冊（八三丁）

（箱書「梅寿院様御譲伊勢物語 筆者不知」、武田本の奥書あ

り。江戸初葉写）

伊勢物語 大一冊（七五丁）

（箱書によれば中院通純筆と、近世初葉写）

伊勢物語 大一冊（六三丁）

（奥書）

此物語令書写誌 元禄十一年二月上旬権中納言（花押）

（極札「筆者今城中納言定経卿 外題有栖川幸仁親王」）

大和物語 大一冊（二二三丁）

（寛喜三年奥 享保十二年奥 滋野井公澄跋 延享二年従二位藤

（花押）の奥書あり、江戸中葉写）

うつほ物語 五卷函

（俊蔭巻の絵巻、江戸初期写）

おちくほ 大一冊（二二丁）

（前半のみ、江戸中葉写）

袖かどみ 大五冊函

（室町末葉写、源氏物語の梗概書）

種玉篇次抄 大一冊（二六丁）

一一五

一一九

一一四

一一七

一一六

一一二

一一九

一一〇

一一三

一一三

一一二

一一四

宗詒著（文明七年と文明十三年三条西実隆の奥書あり、江戸初葉写）

○源氏系図 折大一帖

五〇一五

（長享二年の跋あり、江戸初葉写）

○源語秘訣 大一冊（一九丁）

一二五

一条兼良著（文明九年 兼良與、文明十八年三条西実隆與、慶長

戊申中院通勝與あり、江戸中葉写）

○源氏物語與入 大一冊（七二丁）

一二八

藤原定家著（江戸中葉写）

○さこもろ 栞八冊函

三〇

（元禄乙亥了眠の極札によれば、松殿道基、中院道純、飛鳥井雅

章、東園基賢、大覚寺空性親王、実相院義尊僧正、持明院基定、

日野弘資筆、外題は冷泉為綱と、江戸中葉写）

○榮花物語系図 折大一帖（二四丁）

五〇一三

（奥書）

此物語のうちにその名あまた待れとそよそれとしらても聞ゆるは

もらしぬをろかなる女のしいたせることなればこうせいのおくちを

あはせかたきのみ（江戸初葉写）

今物語 大一冊（三五丁）

一三三

（江戸中葉写）

続世継（今鏡）大一〇冊函

一五二

（江戸中葉写）

住よし物語 大一冊（五六丁）

一二六

（江戸中葉写）

宝物集上下 大二冊函

（江戸中葉、一異本）

○建礼門院右京大夫集 栞一冊函（二一四丁）

六二

（南北朝頃写、正元元年の奥書あり）

方丈記 栞一冊（三六丁）

一四一

鴨長明著（江戸中葉写）

嵯峨野物語 大一冊（一〇丁）

一九五

二条良基著（享禄二年の奥書あり、江戸中葉写）

須磨名月記 中一冊（一一丁）

八六

梅屋主人編 編者写（享保八年中秋のこと）

池上紀行 中一冊（九丁）

一三三

梅屋主人編 自筆（享保年中写、内題「遊池上山本門寺記」）

梅屋病課 大一冊（一八丁）

九六

梅屋主人著（享保十五年のこと）

○故唐律疏議附釈文 大六冊函

唐長孫無忌等編・（釈文）元王元亮編（江戸中葉写）

筆助翻格 大一冊（二三丁）

（江戸中葉写、梅屋旧蔵）

四季法礼 大一冊（四四丁）

水鳥之成著 江戸中葉写

梅屋集 半三冊帙

梅屋主人著 自筆（漢詩集）

俚言解 大一冊

一〇

環中迂叟著（刊本よりの写）

第二部

○三五要録 一卷函入

藤原師長著、後小松院御宸蹟 楽調の書

○基俊秘抄 全 列帖 一冊 墨付五十枚

別称 悦目抄 著者 藤原基俊 書写 江戸中期（筆者不明）

類従本と項目、辞句および所収和歌に多少の異同がある。特に終りに「伊勢物語の極秘」を付す。立申起請の事および基俊、俊成、俊成女、相伝の跋を有す。

此書ハ家之人にもゆるさず、余の家の人ハ名をも不聞、年来不淺此道にすぎ給へる心さしなれはゆるしたてまつる。たとへは淵は漸になるともあたに予より外にゆるすましく候、あかれは住吉玉津嶋乃御利生にあつからせ給へし

嘉禄元年月日 藤氏判 五条三位女コシへ入道御前

俊成卿女子相伝之一巻也

定家禪門等以秘書也

○詠歌大概 函入列帖一冊 墨付九丁 三条西実隆筆（極札二葉、

琴山の印あり）栄昌院様御讓物の一

○詠歌大概 列帖一冊 墨付十七丁 十市遠忠筆（室町末）（栄昌院様御讓物の一、土御門院御百首と同題）詠歌大概抄なるも簡略なり。

○竹林抄（竹園抄）栞形列帖一冊函入 墨付三十二丁

題簽なく、函蓋に竹林抄とあるが、内容は竹園抄である。

著者 藤原為顯

書写 室町末期（近衛植家女慶福院殿玉榮筆の極書あり）
奥書

是は秘事也。初心の者の為なり。ゆめ／＼人にみすへからず。為顯入道殿小童之時竹の林にて父のをしへ給へる言を書きあつめ給ふ物也。世間にひろまりつる事也。

為家為顯能基空忌 四代也。

通行本「竹の林」を「竹の園」となす 類従本、歌学大系本（寛永版本）に比し、後者に近い。

○秘歌集 列帖一冊函入（栄昌院様御讓物） 墨付三十一丁

函表に和歌集とあり。題簽なし。蓋裏に秘歌集甘露寺大納言伊長卿正筆 天文十七年薨と書きし貼紙あり、主として新古今集の秀歌抄。まゝ古今、後撰集の和歌もあり。全部で百二十二首。

○清案集 列帖上下二冊

江戸中期写

和歌作法書 上 一、風躰事 二、取本哥事 三、代々宗匠不庶幾之由被申たる詞他 四、同名之所 五、同類之事以下數項 六、難之事以上六部よりなる。

○勅撰名所和歌抄 乾坤二冊袋綴 墨付共に七十四丁

別称 勅撰名所和歌抄出

編者 宗頌 書写 天文十一年（筆者不明）

奥書

此勅撰名所和歌為連歌用意宗頌法師抄出之分而為上下二冊。所謂

芳野山詠花菴出河劇紅麩之類其數不可勝計。略而注一兩首。於詠殊景物等者書加之。凡連歌付合專至繞後撰集可用本歌之由去年重而伺 天氣令治定畢。於作例者至新統古今集可引用之間今所載此抄也。錯乱漏脱事等猶可加取捨云々。予一覽之次聊録大綱而已。永正丙寅林鐘上澣 槐陰散人在判

天文十一年^{壬寅}仲春十四日書寫訖 (持主 梅巴齋)

○代々勅撰部立 枳形 列帖一冊 墨付六十三丁

内題 代々勅撰部立并卷頭卷軸作者

著者 不明 書寫 康応元年六月十五日

奥書 康応元年六月十五日書寫之

覺所きと注付之 更不可有外見之者也。羽林良將藤花押

古今集より新後拾遺集まで二十代集の摘要。康応元年写本に三条西実隆の書入あり。大日本歌書綜覧に「函書寮本飛鳥井雅世の奥書ありその成りし時代を知るべし。」と見えるも、康応元年以前に溯りうることを明らかなる。

○詞花和歌集 函入列帖一冊 墨付七十七丁

編者 藤原顯輔 書寫 室町中期 筆者 函蓋に飛鳥井殿雅綱卿とあり 奥書 なし。

国歌大観番号にて8 (新院)、162 167 (後冷泉院)、238 257 258 259 260の八首欠。新院御製「久かたの天の香具山出る日も我かたにこそ光さすらめ」雑下³⁷⁷378の間にあり。

函蓋に榮昌院様御讀物の貼紙あり。

○金葉和歌集 列帖 一冊 (函入) 墨付一一五丁

墨付百十五枚 編者 源 俊頼 書寫 室町中期 筆者 中御門宣秀 奥書

前左京大夫源朝臣俊頼依白川法皇御氣色撰之。密奏之、後背御氣色三ヶ度。撰改有愈細而三本云々。

天治元年奉之大治元二之間奏聞之

此和歌集者中御門宣胤卿息黃門宣秀手跡也奥書等珍重物也。歌數聊多世流布本。可秘函底而已。慶長十四年季秋上澣 光広花押 函底の書付 (原代弘賢書)

此金葉集初度奏覽の本と存上候 故本にも合不申、三度之本とも相違仕 世間比類無之候上 烏丸光広卿奥書珍重御座候 弘賢 續類従本の祖本と目せられ、同本になき三十五首を補うことがで

きる。石井和男氏「伝中御門宣秀筆金葉和歌集」(語文研究創刊号)参照。

○自讃歌 函入列帖一冊 墨付三十二丁

後西院御宸翰 (榮昌院様御讀物) 添書二通

(町口越中守宛東久世三品公長義)

○自讃歌抄 列帖一冊 墨付六十九丁 著者 頼阿。奥書に元徳二年九月日終功之頼阿とある原本の写。江戸中期か。

○土御門院御百首 内題 土御門院百首御製 列帖一冊十四丁 連歌師宗養筆 (室町末写)

(榮昌院様御讀物の一、詠歌大概と同函)

續類従本に比し合点、歌詞及び後評に多少の異同あり、定家卿裏

書云以下の跋文なし。

○山家集 列帖 小横本 一冊 墨付六八丁

別称 異本山家集(周嗣本系統)

著者 西行 書写 慶長八年三月六日 筆者 烏丸光広

奥書 慶長八年三月六日至丑刻遂功卒 同 四月十四日一

校卒 此一冊 祖父光広真筆也 戸部侍郎藤原資清花押

○孝範集 枳形列帖一冊墨付 二十七丁

別称 源孝範集 書写 室町中期頃か 奥書 なし

類従本の末尾に「右孝範集。未得異本無由校正云々」とあれど、類従本に比して小異あり、しかも類従本の不明の辞句を補正しうる点において貴重。

○春夢草 列帖一冊(中巻のみ) 函入 墨付四十丁

著者 牡丹花肖柏 書写 室町中期(菅原長治筆)

奥書 菅原長治令書写者也 夢老花押

極書右牡丹花如細奥書菅原長治法名宗全。真跡無疑者也。寛永

拾一曆七月廿五日 古筆了佐 花押 押印

右によれば正本に近きものか。

○雅経卿百首 列帖一冊 墨付十四丁 兼截法師筆の極札あり、

室町中期写 冒頭に

冬日詠百首応御製和歌 従五位上行侍従 藤原朝臣雅経上とあり。

○美濃背山奉納歌 枳形列帖墨付九丁

藤原利綱著並びに筆 伊豆守藤原利綱 和峯権律師秀水各十首

永正八年辛未十二月二十七日当社の遷宮を執きたあるとて廿一日

より守殿政房御参詣後騎として参りてみのゝを山の松の干とせを祈、関の藤川のなかれたてたらんちかひをおもひて十首の瓦礫を折し侍り。

○伊勢物語 一帖

三重箱入、厚手鳥子料紙、列帖装、墨付一六六丁縦一七・二纏、

横一五・七纏、鎌倉時代末書写。勅物注記あり。

流布本奥書「抑伊勢物語根源、古人説と不同云々」あり。

卷末識語に

このさうしひとわたりたしかにみさふらひぬおもひかけすふてをそへけぬるこそ

かすならてとしふるあまもゝしほ草かきをきなからあとをほ

ちつゝ、

為家筆とせる極札四通あり。古筆了泉酒野軍七宛書状、了佐、了榮了仲。了佐の極札左の如し。

這一冊、伊勢物語全部

外かすならて哥有 為家卿御真蹟風流雖相替不涉異論者也、或人依所望證之而已。

明曆三丁酉年、十一月上旬 古筆了佐卿

○伊勢物語

箱入。料紙鳥の子、列帖装、墨付八九丁、中型(縦一七・〇纏、

横一二・五纏)筆蹟により三条西実隆自筆本なること明白。

奥書 天福二年正月廿日己未申刻凌桑門之盲目、連日風雪之中

遂此書写 為授鐘愛之孫女也、同廿二日校了

鳥山牛庵、古筆了佐の実隆筆との極札各一通あり。

○伊勢物語 一帖

箱入、縦24種、横162種、料紙鳥の子、列帖装大型本、墨付九六丁、近世初期写。

「合多本所用捨也不備證本、近代以狩使事為端之本出来」云々の武田本奥書あり。

つぎに細川幽斎の識語あり。

京極黃門定家卿自筆之伊勢物語去年仲秋感得之。彼本諸方展転之旨舛耳。累年仰望之夙忽落手裡。我家之至宝何物若之。故旦夕々握瓶有其恐。仍自搦秃毫不違一字写之、再三加勘校。是為容易令遊目也

天正十七年十月下旬 玄旨判

○
この物かたりは伊勢といふ女のかきわけたと見えたり、それを中納言ていかの卿の筆をそめられたる一てうをもとめいたして、ひさうのあまりにみつからかきてあさ夕もてならし侍る。その本をもてわこのためにかさねてこれをうつす。老のなみにたゝよひすゝりのうみのあさきによれるもしは草かきのこしてのちのかたみともなし侍らんといふこゝろしかなり

(花押||幽斎)

包紙に

外題 中院也足(通勝)

表紙の絵 宮川筆者ノ姉

とある。

細川幽斎の花押があるが、筆蹟からみて、幽斎自筆とは見えす、

幽斎自筆本の忠実な写本か。

○大和物語一冊

美濃紙袋綴、大型(縦二八・九種、横二〇・五種)墨

付一二三丁、近世中期写。本文は為家本系統百七十三段につづきて、

花山院の御つくり物語なりとある本にありとある。

奥書 宇多法皇の経歴を記した後に、

寛喜三年八月十八日辛未時於北辺蓬屋終書写之功、閑居徒然之余也、目盲手振不成字 推量而染筆許也、即校了、当初書写物以無落字為一得、毫及之後已落數行書入之、可恥可悲、

その裏面に

此大和物語以関白殿下家久御秘本本源自性院関白校合之勘物等

一書加之難書入之所、以押紙注之、抑件考京極黃門定家所書載歟、

其子細古今集伊勢物語之勘物相似書面之故也、猶可尋、而奥書云寛喜三年八月十八日終書功云々 且明月記則記之所見符合尤

非可疑歟 甚所自愛也、而斯類本世上希有歟 可秘云々

享保十二季十月十三日 散木重槐藤(花押)

公澄勘付(滋野井公澄、享保十二年、權大納言)

明月記

寛喜三年八月十八日辛未天晴徒然之余以盲目日来時々書大和物語 今日終功了 是又狂事也 互可嘲多終日著綿如昨日草

子如形校了 平生所書之物以無落字為惡筆之一得 毫老心脱
落致行書之心中為恥

さらに紙面を改めて

此大和物語一冊以入道前大納言良寛 俗名公澄校合之本 今書写之了

件本子細覽彼奥書 仍不注之 最可秘藏者也

延享二年二月 從二位藤(花押)

○うつほ物語 五卷

箱入 卷子本、料紙鳥の子 江戸初期写、各巻題簽を付し巻序を示す。内容は俊蔭巻全卷。

巻一「俊蔭が有し時に」(古典全書本一四三頁)より

巻二「おほやけにことの上しを」(右同九三頁)より

巻三「むかし式部の大輔」(右同七七頁)より

巻四「その日みかど」(右同一二六頁)より

巻五「十月ばかりになりぬ」(右同一一〇頁)より

土巻序は内容と矛盾するが、題簽の誤貼によるか。絵は彩色、巻一に

三景、巻二に三景、巻三に五景、巻四に三景、巻五に五景あり。

奥書その他なし。

袖かゝみ 五帖

箱入、料紙鳥の子、列帖、大型本(縦三二・八糎、横二五・〇糎)

室町末葉写、著者不明、各巻其源氏物語梗概を記す。

巻一 八七丁 桐葉花裏

巻二 一〇九丁 葵乙女

巻三 八九丁 玉鬘若菜上

巻四 七〇丁 若菜下竹河

巻五 七四丁 橘姫夢浮橋

各巻頭に巻名目録を掲げ、並びの巻を指摘す。

○種玉篇次抄 一帖

料紙鳥の子、列帖装 二六丁、大型(縦二五・〇糎、横一八・三

糎) 近世初期写、外題内題は共になく、包紙に「光源氏の物語」と記されているが、内容は宗祇著「種玉篇次抄」である。

奥書に文明七年乙未冬十二月

その裏面に

本云右抄、宗祇法師此物語講説之頃 一部之門偏次縦横難啓尽

蒙之所々聊加諮問之処 近曾以今案有勘出之鈔 後日可免電覽

云々遂而携一卷来、即命菅城子乞写之訖、須謂此道至宝、觀者

不可以其近忽之也

于時文明十三年辛巳無射二十有一日

權中納言從三位兼行侍從藤原朝實隆卿 臣

○源氏系図 一帖

料紙鳥の子、折本(縦二七・一糎、横一九・二糎) 四八丁 近世

初期写

卷末跋文に

光源氏物語けいつといふ物はいつれの代よりいてきたれ人のし

わさなりといふ事をしらす いまち／＼にして是非わきまへか

たし きためててん／＼書写のあやまり成へし 此ころこの物

かたりにころさすともから三四年か程たかひに相かたらひ

五十四帖のうちしつかにひらき見て煩乱をかりたひらけ浮詞を

きりさる 就中氏族たしかならず前後見えざるともからをは一
巻くにおきて一人くをしるせり 但わらはすいしむことき
その程なきものいたりては是をのそく つるにして討論調色
をへすなわち書写校合をとへる物也 おほよそかの物語は代々
のもてあそび物として家々の注辭かすおほしといへとも 桃花
坊の禪閣の花鳥余情を抄して松岩寺の相府の河海の遺漏を決し
給へるに過たるはなかるへし、かの序にも のこれををひろひ
あやまれるをあらたむるは先達のしわざにそむかされは 後生
のともからなむそしたかはさらんやと筆をのこし給へれば い
まのけいつのおもむきこのきりにひとし かくさためをける中
にも 猶あやまりなきにあらざるへし 將來の君子必心さしを
おなしくすへしといふ事しかり 于時長享二のとし青場の三月
是をしるしをはりぬ

○源語秘訣 一冊

美濃紙袋綴、墨付一九丁、中型（縦二三・九種、横一七・〇種）

一条兼良著、源氏物語難語十五条を解釈せるもの

奥書 唯伝一子之書也 不可出闕外付囑中納言中将云々文明九年
二月吉日 後成恩寺也老納覺惠（一条兼良）

冬良公

此一冊密て以懇望申請左大将家本後成恩寺書写之綴雖為親昵

之人 曾以不可免披見之 懸春日大明神住吉玉津嶋等明神 取

相誓也 永可存此旨者也

文明十八年四月廿四日

正三位行権中納言兼侍從藤原朝臣判

右遣遣院也卅二才

（三条西実隆）

一枚之了

此秘抄往年以件奥書之本書写 校合之 而今源孝子 浅井 所望

之間 終源氏物語一部講席之功後感其願志 附而此別勘、是為

補愚之短才也矣

慶長戊申仲秋十一日 也足曳在判（中院通勝）

○源氏物語奥入 一冊、

美濃紙袋綴 縦二七・四種、横一九・五種、墨付七三丁 江戸中

葉写 奥書なし。

内容は定家奥入であるが、「源氏物語大成」本（自筆本）および
類従本と比するに、異同が甚だ多い。

○さころも 八帖

箱入、料紙楷紙、列帖装、枱型（縦約一七・〇種、横約一八・〇

種）江戸初期写 異本

各巻とも表紙中央に題簽を付し、すべて「さころも」と記す。

巻一「しよねむの春をおしめとヨリ」おほかたさかしうもせてみ
るなりと、ふさはしからね御けしきにそおほえ給」マデ一〇九丁

巻二「かのおすかいはは」ヨリ「なくなくなをうみをのそき給

へり」（流布本巻一終）マデ三八丁。

巻三「物おもひのはなのみ」ヨリ「おほろけならぬ御さまにおも

ひすくし給なるへし」（有明堂文庫本一七五頁）マデ八五丁。

巻四「ありしねさめのとこの枕の」ヨリ「おほしいりてすゝを

りみたまへるはしるしなきやうはあらし」(流布本巻二終)マ

デ五二丁

巻五 「み山の里のさひしさは」(有明堂文庫本二二一頁) ヨリ

「さてこりさせ給へかしあまりの給はするは」(有三三五) マデ
五七丁。錯簡脱文多し。有明堂文庫本と対照するに左の如し。

(1) 巻頭より二二ウ・末行「侍なるこれはいかな」マデは、有二
二一・一と二三八・九(算用数字は行数)に相当。

(2) 二三オ・初行「なるちこ齋の御うゑの」ヨリ三四ウ・末行「う
つろひ給ていか」までは有三〇一・11と三一五・3に相当。

(3) 三五オ「ものをいかにきく給」ヨリ四六ウ「をしもたてすな
りにけり」マデは有二五七・10と二六九・1に相当。

(4) 四七オ「につれつれをとをしはかり」ヨリ巻末「あまりの給
はするは」マデは有三一五・3と三二五・12に相当。

即ち(1)(2)(4)の順に配されるべきであり、かつ、(1)と(3)の間には
有二三八・9と二五七・9に当る部分、(3)と(2)の間には有二六九・
1と三〇一・11に当る部分、(4)の次に有三二五・12と三二六・3に
当る部分がそれぞれ脱落している。

巻六 「としたちかへりぬれば」(有三二六・3) ヨリ「もとのや
うにをかせてまつらせ給てそいてさせ給ける」(有三八九・2)

マデ一三七丁。

巻七 「まこと院の女御は」(有三八九・3) ヨリ「おもひしら
るゝにみたて」(有四六七・5) マデ八七丁、以下有四八三・

9に相当する部分まで脱。

巻八 「この比世のなかさはかしくて」(有四八四・1) ヨリ巻

末マデ七二丁。

奥書 本文と同筆

巻一 「本云 やよひのなかの二日さつまのくにたくまのなかに
てひ東むきにてあめしめく」とふりいるか たゞいまははれた
るに とりみてみの時にやかきいて候也。」

巻二 「やよひのしもの六日、さつまの國たくまのなかにて、あ
ゆふりてたゞいまははれたるそらに、むまのをはりにや、かき
はて候也」

巻四 「きさらきのはしめの六日 さつまの國たくまのあたらし
き所にて、ひつし風ちとふくにますちよふたりみて かきはて
候也。御らんせん人南無阿弥陀仏十返かならず申てとふらひ候
へ。」

古筆了厩元禄八年の極札あり、第一巻は松殿道基、第二巻中院道
純、第三巻飛鳥井雅章、第四巻東園基賢、第五巻大覚寺空性親王、
第六巻実相院義尊大僧正、第七巻持明院基定、第八巻日野弘資の
各筆とす。

○榮花物語系図 一帖

料紙鳥の子、折本(縦二七・〇釵、横一九・二釵)二四丁 近
世初期写、

人名には多く貼紙を以てよみがなを施す。内容は明暦版本に比し
て大違あり。

巻末跋文

此物語のうちにその名あまた侍れと そよそれとしらても聞ゆ
るはもらしぬ をろかなる女のしいたせることなれば こうせ

いのかちをあはせかたきのみ

○建礼門院右京大夫集 函入 列帖 一冊

墨付一四丁 題簽なし。

書写 鎌倉後期乃至室町初期（書陵部本系） 筆者不明
奥書

本云、建礼門院右京大夫集也。此本自筆なりけるを、七条院大納言さりかたきゆかりにてこのさうしを見せられたりけるをうつされたとらん、

以承明門院小宰相本正元元年二月二日書写卒

この奥書は書陵部本又は彰考館本に大体合致し、校異も書陵部本に殆ど一致する。

○よるのつる 一冊

料紙薄手鳥の子、袋綴、大型（縦二四・四種、横一八・一煙）、阿仏尼著

本文中漢字には多くよみがなを付す。類徒本に比するに、仮名遣の誤、誤字多く、連文あり。

奥書、

此夜鶴者安嘉門院四条（阿仏尼）作也 冷泉家秘本以為益卿真筆
幼稚春之比合書写訖

寛永十八年

初春日

源（花押）

花押は細川光利のものかと思われる。